文春 63年2月

新入りの経理課長に調べさせた。結果は、約二百万円と出た。これなら、何とかなる。とはその数字を疑いもせずに、一応胸をなでおろし、この赤字について責任をとってくれるようQ社の社長に対して直訴の手紙を出した。

手紙は秘書課長でストップし、これ以上騒がれると困ったことになると判断したのだろうか、Q社は手切れ金として、百万円を私個人に対してさし出した。私はその金を黙って受けとり、苦しい会社の経理に放り込んだ。

二百万円だと考えていた赤字が、実は千六百万円以上もあることを発見したのは、それからしばらくしてのことであった。中小企業恐しさ、決算までできるという言葉を信じて、最初から三万円の月給で採用した大学出の経理課長は、実は何もしらない男であることを誰も気付かなかったのだ。

今となっては遅い。この数字をQ社に持ち込んだところで、誰が相手になってくれるだろうか。私は、敗れたことを知った。

去るものは去った

それから一年、あらゆる努力をした。いくつかの会社ともかなり積極的な交渉があった。

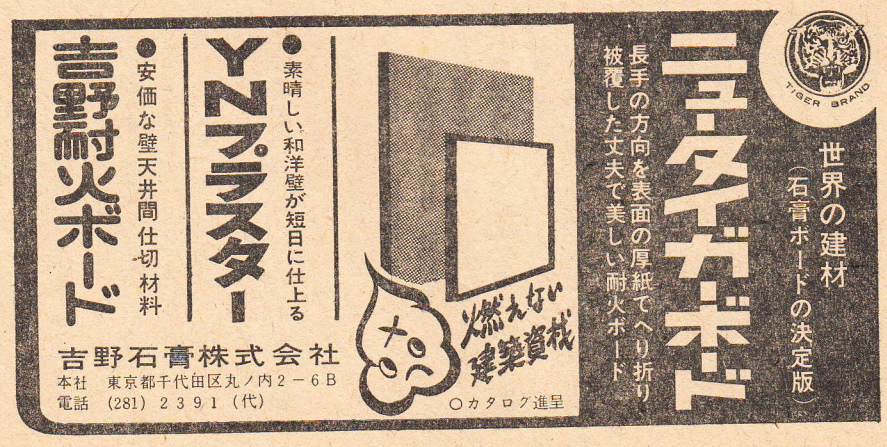
しかし、銀行からは最終的に見離され、信頼する部下たちは社内極秘の情報を土産に、交渉のあった相手の会社へ技術と一緒に身売りしていった。

去るものは去った。今、私は債権者の群を持つばかりである。この秋、私は倒産し、その無能さを、天下に公表した。零細な債権者にどうして償いをしたらよいのか。これからそれを、考えなければならない。

つまらない話をお聞かせした。善人にもなれず、悪人にもなれず、さりとてベテランの足もとにも及ばぬ私であってみれば、ごらんのようになるのも、あたりまえなのかもしれない。

中小企業十年の夢破れて、私はしみじみと数多い日本の中小企業経営者に御苦労さまと言いたい気持がする。資本主義は甘い夢ではないのだ、ということを、四十七歳になった今、私は初めて知った。

——発展する資本主義を象徴するスモッグ。現在の私には、それも無縁である。



秘録「東条事件」

戦争末期、狂気と混乱の中に命を賭して和平の道を切り開こうとした男。だが、その成功を眼前に彼の手首には冷い手錠が喰いこんだ

香取史郎（ルポライター）

腕時計をもたない男

昨年の暮、新聞は大きく「テレビの12チャンネルいよいよ本放送」という事実を伝えた。それも現在放送されているようなドラマや実況を中心とするようなものでなく、第3チャンネルをもっと高度化したような「科学テレビ」ということだった。

この記事を読んだ時、誰もが、果してそうしたものが成り立つのかどうか、疑問に思ったことだろう。しかもそれが専門の民間会社ではなく、財団法人・日本科学技術振興財団という法人の手によって電波が発射されると知れば、さらにその疑問は深まったろう。

だが、ひとつかみほどの、その成功を信じて疑わなかった人々があった。それはなんらの疑義をはさまぬ、「あいつなら、きっとやる」という、ある一人の男に対する全幅の信頼によるものだった。

かつてその人は帝国陸軍を追われたことのある男であった。昭和二十年春、叛逆者の汚名のもとに位階勲等を剝奪されたうえ、暗殺の魔手に追われ、彼は日本から脱出していった。この時、一度は愛する祖国を失った男でもあった。それ故に、過去を、彼は強いて想い出そうとしない。いや、想い出したくないのであろう。

男の名を津野田知重という。現在、日本科学技術振興財団の専務理事、いわば12チャンネルの立役者である。家庭にあってはよき四児の父であり、その子煩悩ぶりは財団でも評判の、同時にその精力的な活動ぶりも財団一の人物である。

旧軍隊の幹部クラスにいた人なら、たとえ一面識がなくとも、おそらく彼の名は知る人は多いだろう。陸士、陸大とも恩賜で卒業した俊秀であった。いまの彼に昔の名残りはうかがわれない。だが、時々、黒ぶちの眼鏡の奥の細い眼は、きらりと、無気味な光を発するのである。

戦後十数年、彼は今までまとまって、「過去」を語ったことはなかった。だが、ふウと、